未完の肖像画

杉本宜子

月光があたりを青白く照らしていた。庭にはどっしりと腰を下ろした桜の木が満開の花びらを散らしていた。時折吹く風が仄白い花びらを中空に巻き上げて、蝶の乱舞する光景を作り上げていた。そして遠くでつく鐘の音が限りない無常の響きを伝えている。

道子はこのとき次姉、環の家の庭に立って散り急ぐ桜の木を見上げていた。散りようは容赦がなかった。この夜庭に面した二間続きの日本間では、道子の義兄、正人の通夜が営まれた。やがて弔問客も去り、身内だけが家に残された。

親戚の者たちは最後の客を見送った後、仕出し弁当の遅い夕食をとっていた。男たちはネクタイを緩めて、ひざを崩した。酒も入ったところで緊張感もやや解けて、故人の思い出話や冗談を交わした。

正人は五十八歳だった。死ぬにはまだ惜しまれる年齢である。この世に絶対的なことといえるのは、生まれることと死ぬことだろう。惜しまれる歳とはいえ、家族の誰もが正人のこの死を厳然たる事実として受け入れないわけにはゆかなかった。女たちは環がこの二年間献身的な看病を続けたことに対して、本人がその場にはいなかったけれどねぎらいの言葉を交わしていた。

環は正人の側で亡骸に寄り添うように、いつまでも座っていた。黒の喪服に身を包んだ環の顔は青白くやつれてはいたが、道子にはどこか凛とした美しさを感じさせるのだった。道子はその姉の姿を少し距離を置いたところで見つめていた。

道子は桜のざらりとした木肌をなでた。木は環たちが結婚した年に植えられたものだと聞かされていた。つまり年輪は二人の結婚生活を刻んでいるのだ。だから樹齢三十年くらいになるのだろうか。環は今五十二歳であった。道子とは五歳の歳の開きがある。

このとき誰かが道子の名前を呼んだ。

振り返ると、長姉の友子が手招きをしている。道子の姿が見えないので探していたようである。一緒に食事をしようということらしい。一室には道子の兄の武藤明とその妻、友子夫婦、道子の夫やほかに年老いた母親がいた。母親とは道子たち兄妹の母親である。正人は親もほかに兄弟や親戚はいなかった。

若い子達は別室でやはり食事をとっていた。道子の子供たちとそのいとこたちである。環夫婦にも息子と娘が一人ずついた。彼らは結構にぎやかにやっていた。正人の進行性の胃がんが彼の身体に認められたのは二年前だった。担当の医師は余命半年と言ったのだが、正人の生命力は医師の見通しを裏切って、二年間生き抜いた。

しかし、悪性の胃がんは今の医学では克服することはできなかった。家族はこの二年の間に、夫や父親の死を受け入れる覚悟をしなければならなかった。正人の死はむしろ彼を肉体の苦痛から開放してやる、一つの儀式になった。彼らは父親の夫の死を、それぞれの心の中で昇華させたように、道子には感じられた。

道子が座に加わった。座卓を挟んで差し向かいに座った友子の夫、久は「みっちゃん、今日はごくろうさん」と言って、コップにビールをついでくれた。筋からいえば道子の方が先に久に言う言葉だったが、もうみんなそんな古いしきたりを云々するほどの細かいことにはこだわらない間柄になっていたのである。

道子は四人兄妹の末っ子だったので、幼いころからみっちゃんと呼ばれて兄夫婦や姉夫婦からかわいがられていたのだが、その呼び方は年齢が長じても変わらず、今日にいたっていた。

年老いた母親がまぶたを腫らしていた。そして言った。

「環はまだ五十二歳になったばかりだというのにもう未亡人になってしまって、子供たちだって二人ともまだ片付いていないんだし、これから先、苦労が多いだろうに、可愛そうだね……」、と。

すると、久がその言葉を拾うようにして

「お義母さん、環さんはしっかりしているから大丈夫ですよ。正人君が入院していたときでも商売の不動産業も看病も見事にやってのけていたじゃありませんか」と言って、少しでも老いた義母の苦労を和らげようと、めがねの下から優しい目を向けた。

「でもね久さん、女は亭主がたとえ病気でも生きているのと、死んでまるっきりいなくなってしまうのとでは、気持ちの持ち方が違うものなんですよ」、老母はつつましく答えた。

すると

「それは母さんの場合でしょ？　環が母さんと同じ考えとは限らないわよ。だって環は正人さんの火遊びのおかげで散々苦労させられたんですからね。それにあの子、今日は涙ひとつこぼしていないわ、亭主が死んだって言うのに。ほらこれまでだってわたしたち身内や姉妹にだって、正人さんに泣かされても愚痴ひとつこぼさなかったじゃない？　辛抱強いのか、元来人間がつめたいのか……」と言って友子は、言葉が過ぎるぞと久にたしなめられた。

母親はまたしてもぽつりと言った。「どうしたことなんだろうね、環だけはほかの子たちと違って、子供のころから性のきついところがあるんだよ」と。

友子は環の年子の姉だった。彼女は環とは性格が対照的で、表面的には明るく勝気で思ったとこはすぐ言動に表し、夫の久を尻に敷いていた。

「そうだよ母さん、俺も死んだ人間を悪くは言いたくないけど、正人は食えん奴だったよ。彼が不動産であそこまで成り上がったのは、死んだ親父の援助のおかげだろう。それが、その恩も忘れて、飲む、打つ、買うじゃ環があんまりかわいそうだよ。親父だって飼い犬に手をかまれたようなもんだよ」と、道子の兄の明が言った。

明は武藤家の長子で正人とは同い年の五十八歳だった。年齢が同じ分、明は仕事のできる正人に対して若いころからライバル心を持っていた。彼の中には父親の援助を受ける正人は、立場や実力が自分を上回るのを許せなかった。

明のそんな言葉を受けて友子はそれを肯定する相づちを打った。そんな中で、道子の夫

と兄嫁はその会話には加わらなかった。彼らはそれなりに故人のゆかしい面を見出していたのかも知れない。あるいはこの場にふさわしくない話は意図的に避けようとしたのかもしれなかった。彼ら二人は分をわきまえたのか極端に口数が少なかった。

こうして通夜は更けていった。道子はさきほどの兄の言葉に少なからぬ反発心抱いた。兄はただ昔からのことわざを使っただけのことかもしれないが、お金の力が人間を犬におとしめてしまうさまを見て、彼女は唖然とした。お金は確かにその人の実力を物語るものではあるが、正人に援助を与えたのは兄ではなく父親だったのを、彼は考慮に入れていないようである。明自身のこれまでの事業も、父親の成功の土台に立脚しているはずであるのだが、道子は兄の言葉に大人げのないもの感じるのだった。

道子はこのときふと空しさを覚えるのだった。身内だけとはいえ、通夜の席でこんなことを言ってのける兄の神経が、血肉を分けた妹として聞いていて情けなかった。自分たち兄妹もみな父親のバックアップのおかげで今日があった。それは正人に限ったことではなかったはずである。事業にある程度成功し、大きな家に住み、高級車を乗りまわしていても、それらの生活のスタイルが、必ずしも人間の品格や知性に比例するものではないらしいのを、道子はいまさらながら知らされた。

だからといって彼らが正人の死をまったく悲しんでいないわけではなかった。遺体が病院から戻ってきたとき、みな一様に大粒の涙をこぼし、嗚咽を漏らしたのだった。むしろ環が一人、感情が乾燥しているように見受けられた。明日は葬式である。当然お別れのセレモニーはそれなりに悲しみに満ちたものになるだろう。明や友子も今夜こんなことを言ったのは忘れて、明日は涙を流すに違いない、道子はそう思った。人の感情はとうてい一言では語りつくせないものであるのも事実だった。

座はいつしか自分たちの事業の話に移っていった。死んだものはすでにこんな席でも過去に存在したものにしか過ぎない。後は生き仏の娑婆なのである。道子はそっと席を立って部屋を出た。彼女は環の様子でも見舞ってやらなければと思った。

だが環は正人の側にはいなかった。部屋にはお線香がともされてその香りがあたり一面に漂っていた。環が座っていた座布団はまだ暖かかった。道子は新しく線香をともし、手を合わせた。正人は静かに横たわっていた。そして道子がふと庭に目を転じると、環がさきほど道子がいた、あの桜の木の下にたたずんでいるのが見えた。

環は空を見上げるようなしぐさをしたかと思ったら、次に舞い散る桜の花びらを両手に受けて、それを追いかけるかのように、身体をゆるやかに回転させた。まるで子供が遊んでいるようにも見えた。だが次の瞬間、道子は、あっと息を呑んだ。

それは本当に瞬間的なできごとだった。環の白い顔が般若の面を付けたかと思ったら、小面に変わった。そして瞬きする間もなくもとの環の顔に変わったのである。道子の尻は正座した両方の足の上に腰からずっしりと沈み込んだように、動くことができなかった。彼女はしばらくそのままの姿勢で呆然と環を見つめていた。

環はひとしきりの動作を終えると、自分を見つめている道子に気がついた。彼女は何ごともなかったように、夫を今しがた亡くし悲しみに打ちひしがれている様子などは微塵もみせなく、軽い調子で道子を庭に降りてくるように手招きした。

道子はふらふらしながら立ち上がった。

「みっちゃん、わたしが涙を見せないから驚いている?」と、環は道子を迎えながら話

しかけてきた。道子はとっさになんと答えていいのか分からなかった。友子姉のように正直にそれを肯定する勇気がなかったわけではなかったが、思慮深い環の性格を考えるとき、内心になにがしの事情を抱え込んでいるようにも思えるのだった。いや、そのほうが正解かも知れなかった。

「わたしね、正人が死んで、自分自身がどこか解放されたような感じなのよ。彼自身もそうだと思うの。夫を病気でなくしてその日のうちにこんなことを言うなんて、他人はこんなわたしを不謹慎だって非難するかもしれないわね。でもそれがわたしの今の正直な気持ちなの」

「それは看病から開放されたっていうこと？」

「いいえ、そうじゃないわ。看病は大したことはなかったわ。彼は手のかかる病人ではなかったし、事業そのものは上手くいっていたから経済的にも生活を圧迫することもなかったわ。むしろベッドの上でつらかったのは彼の方よ」

「正人兄さんには、病名を知らせていたの？」

「いいえ、ベッドから降りて、たとえ短い間でも普通の生活ができるのだったらそうしたかもしれないけど、彼の場合はがんもそうだったけど、脳梗塞が先だったでしょ？　その後遺症で身体の自由を奪われてしまっては、それもできなかったのよ」

「そうだったわね、正人兄さん本当につらかったでしょうね。それに環姉さんはわたしたちはた目にも本当によく看病していたわ。いろんな思いがあったでしょうに。正人兄さんを許せないとはおもわなかったの？……」

この道子の最後の言葉には妹としてというより同じ女性としての思いが込められていた。環にもそれは分かった。しかし環はあえて道子の問いにはすぐは答えなかった。だがその姿にかたくななものは感じられなかった。姉は妹を見て微笑んだ。そして久しくしていなかった妹の手をとり、縁側へと引っ張って行きそこで二人は腰をかけた。道子は姉の手が柔らかく暖かいのが心地よかった。

「みっちゃん、今年は特に庭の桜が見事なまでに花をつけたのよ。この木はねお父さんが植えてくれたの。わたしたちの結婚を記念してね。植えてから十年が過ぎてから木は徐々に風格を見せるようになったわ。よそにお花見に行かなくても、ここで十分に楽しめたのよ。ここでよく正人と二人お花見をしたものよ。でもね、ある年からそれがなくなったの。お父さんが死んでから二、三年してからかしら……」

そう言って、環は再び庭の散り行く桜の風情に目を転じた。道子はこの桜の木が環たちの結婚時に植えられたものだとは知っていたが、父親が植えたものとはこのとき初めて知った。道子と環はここでしばらく沈黙した。それは気まずいものではなかった。むしろ芝居のちょっとした幕間の時間のようだった。

環と正人の結婚は恋愛結婚だったが、それを誰よりも喜び二人の生活をバックアップしたのが亡くなった姉妹の父親、武藤弘明だった。正人は早くに両親を交通事故で失っていた。彼は大学は奨学金を得て卒業した。正人は大学時代アルバイトで、武藤弘明が率いる「武藤総合商社」の建設部門で働いた。

正人の多少やんちゃではあったが、やる気があり受け答えの機敏さを気に入って、彼の大学卒業を待って、鶴の一声で会社に採用したのが武藤弘明だった。そして正人は入社後、武藤家の創始者の期待を裏切らない仕事をした。

仕事のできる人間には味方ばかりとは限らない。古残兵がすべて精鋭部隊ではない。彼らは初めのうちこそ身を挺して働いたかもしれない。しかしそんな彼らもいつまでも若いわけではない。歳月は身体から若さを奪う代わりに、要領と世渡り上手という知恵を彼らに授けてくれる。

正人が大学を卒業して「武藤総合商社」に正式に入社した同じ年に、武藤明も父親の会社に入った。明は社長の息子ではあったが、肩書きは平社員だった。二人が持つ色々な要素が仕事の上で彼らをライバルに仕立て上げた。だが二人が決定的に違うのは、その立場だった。明は仕事ができようができまいが、武藤弘明の息子であった。

仕事は正人ができた。しかし次期社長は明である。取り巻きは現社長に忠誠を誓いながらも、常に次のステップもにらんでおかなければならない。そうしなければ、明が社長に就任したとき彼らは出世街道に残ることができない。

明には早いうちから取り巻きができた。取り巻き連中は将来の投資とばかりに明におべんちゃらを使った。武藤弘明の生存中は正人は恵まれていた。明の取り巻きも表立って正人に牙をむくのを控えた。

だがその武藤弘明が病を得て世を去ると、正人の立場は微妙な変化を見せ始めた。すでに環と結婚して十七年を数えていたが、明とそりの合わない関係が解消されることにはならなかったのである。

芝居の幕間は終わった。

環は道子の顔を見ないまま、まるで独白でもするような口調で話し始めた。

「みっちゃん、わたしね、結婚してしばらくしてなんだけど、正人に武藤の家を出よう、って言われたことがあるのよ。……一回じゃないのよ。三回も。彼、自分も会社を辞めてほかに働くって。わたしと子供たちを食べさせるためならどんな苦労でもするって。でもわたしはうん、って言わなかった。そして四回目はなかったわ……」。

道子は環たち夫婦にそんないきさつがあったことなど知らなかった。正人と明は歳も同じでとき同じくして入社したいきさつなどもあり、多少はライバル意識があって当たり前だろうくらいにしか思っていなかったのだが、根はかなり深かったようである。道子は環の独白に口を挟んだ。

「でも不動産部門をお父さんから引き継いで独立したんじゃなかったの？」

「そう、わたしがお父さんに泣きついたの、正人が外に出たがっているって……。でもね彼の夢というか意欲というか目的はそんなところにはなかったみたい。自分の力で何かを興して成し遂げたいと心に思っていたみたいなの。でもお父さんがそれを言い出した以上、彼は辞退するわけにはいかなかったのよ。それにそれがわたしの望みでもあったから」

「でもみんなそうしてもらってるわ、私たち夫婦も友子姉さんたちも、お父さんに独立するための財産分けをしてもらっているじゃない」

「そうね、でもタイミングが悪かったのかしら。結果的には彼のプライドを傷つけてしまったんだわ。後で考えるときっとそうなのよ。実際、初めて正人に武藤の家を出ようと言われたとき、わたしはこの人について行こうという決心がつかなかったの。先の生活や、子供たちの将来のことが不安だったわ。あの時、正人とは好きで一緒になったんだから、彼の決心に従うべきだったのよ。少なくとも彼はそれをわたしに望んでいた。でも、わたしは自分の父親を選んだの、安定した生活を。あの時、正人はわたしの本心を見抜いたん

だわ。きっと裏切られたという気持ちを抑えられなかったのね」
そう言われてみれば道子にも思い当たることがあった。それまでは仕事一本に生きてきた正人が、酒やマージャンや女におぼれだした時期が、環のいうあのころだったような気がした。環は続けた。
「わたしはそのときに正人の気持ちに気づくべきだったのよ。彼は早くに両親を亡くしたでしょ？　だから人一倍愛情には飢えていてそれだけに敏感だったのね。愛情のまがい物には手厳しかったんだわ。わたしは小さいころから両親がいて家族の愛情に恵まれて育った。経済的にもなに不自由なく青春時代を楽しんだわ。わたしはそれが普通だと思っていた。だから彼が武藤の家を出て裸一貫で出直したいと言ったとき、不安で仕方がなかったの。彼の力を信じようとしなかった。彼はよそに女性を作ってわたしを裏切ったけど、先に正人の心を裏切ったのはわたしだったのよ」
環と道子は月明かりの下で濡れ縁に並んで腰を下ろしながら、そんな話をしていた。そして時々互いの顔を見詰め合った。はたから見たら誰もが、二人がそんな深刻な話をしているようには見えなかっただろう。道子の目は環を励ましていた。そこにはこれまで内面世界を語ることのなかった姉の心情をおもんばかる、妹の暖かい情が流れていた。でも道子はふと思い当たることがあって、言った。
「環姉さんたちが独立したのは、お父さんが亡くなる前でしょう？　それなら明兄さんたちとの摩擦も避けられたんじゃないの？」
「そうじゃなかったの、彼、お父さんの意向で独立した後もしばらくは会社に留まったのよ。だから会社を正式に出るまでかなり間があったの。それに友子姉さんたちより早く独立したのもいけなかったのね。友子姉さんたちとも微妙な関係になっちゃって。こういうことって、やっぱり年齢順だったのよ。わたしが我がままだったのよ……正人が明兄さんと決裂して、わたしや子供まで捨てて、武藤を飛び出しちゃうんじゃないかって……それでお父さんに……」
道子は正人という人間を振り返ってみた。彼は苦労して一代で財を成した父親の武藤弘明に通じるものがあった。男気があり生活意欲に富んでいて、自分の力を信じていた。だからこそ父親は正人を見込んだのだろう。
正人が人生なんてポーカーの勝負と同じだと割り切ることができたなら、資産家の娘の環と結婚できたことに限りない幸運を見出したことだろう。しかし事実はそうではなかったのだ。彼は確かに秀でた能力と頑丈な身体を持って、武藤弘明というスポンサーを得た時点ではトランプの7を二枚獲得したことになる。
しかしその7、二枚を持ったとしてもダイヤのエースにはかなわない。ところが彼は環と結婚することでそのダイヤのエースも手にいれたのだ。だが皮肉にも彼にはダイヤのエースは必要なかったのである。
正人はあまりにも独立独歩という精神にしがみついたばかりに、自分を窮地に追い込んでしまったようである。他人は正人がつかんだダイヤのエースを、逆玉といって幸運の旗印のようにもてはやすが、彼はむしろ自分の才能の方を崇拝したのだった。
だからといって正人の選択が良いというわけでも、悪いというわけでもないだろう。彼は孤独の人生の中でさまざまな幸運をつかんでいる。ただ彼の持つ才能がその運を上手くつかんでチャンスとして利用できなかったのだ。その不器用な人間がゆえに。

環がふっと、短い息を吐いた。それを合図のように二人は再び微笑みあった。道子は思い切って環に話してみた。

「環姉さん、わたしさっき、一瞬だけどお姉さんが般若の面をつけているのを見たような気がしたの。ごめんなさいね、こんなことを言って。多分、気のせいか目の錯覚だと思うんだけど、でも不思議とその場面が頭から離れないの、へんね？」

すると環は下を向いてくっくっと笑った。そして

「いやねー、みっちゃんって、子供のころから油断もスキもないんだから。さりげない風で肝心なところはちゃんと見ているんだから。さっき、あの桜の木の下で？　もしかしたら……」、と言って環はその方向を、小さな形のいいあごでしゃくった。そして再び同じ笑い方をした。

この言葉に道子は驚くというより狐につままれた心地で姉の顔を見ていた。環はああ、いやだと言いながら話をつないだ。

「実はね、あの時、正人の最後の女のことを考えていたのよ。片方の乳房のつぶれた女だったわ、彼女。あなたが見た般若の面はわたしの最後の嫉妬心の噴射かな」

「えっ！　嫉妬心の噴射？」

「ええ、火炎噴射よ」

と環は言って、桜の花びらの舞い散るのに再び目をやった。月光の差す群青色の空は高く澄み切って星がまたたいていた。二人は子供のころにかえったような無垢な気持ちで心の中で星の数を数え始めた。

環はそっと切り出した。

「みっちゃん、地獄の釜の蓋って知ってる？」

「えっ！　なんかで読んだことはあるけどどういう意味かは分からないわ。環姉さんは知ってるの？　その言葉の意味」

「わたしも本の読みかじりなの。……地獄の釜の蓋は自らの手で開けるものじゃないって、誰が言ったのかは分からないけど、あれは真実ね」

「つまり、環姉さんはその地獄の釜の蓋を開けてしまったの？」

環はこくりと頷いた。

「みっちゃん、妻ってね、夫の酒に酔いしれるのやギャンブルにうつつを抜かすのには我慢ができるけど、よその女性に溺れるのには我慢ができないものよ。こちらが騒げば夫を追い詰めてもっと女の方に走らせてしまうだろうことは、確かに理屈では分かるの。でもそんなときの妻の感情って、ほとんどコントロール機能が麻痺しているものなのよ。でもね、今思うと、正人の挙動に不信感を抱いたとき、四方から追い込むべきではなかったのね。でも、それも後で思うことなの」

環は広縁を挟んだ日本間に寝かされている正人の方を一度振り返った。その穏やかな顔は、夫との楽しかった思い出話を道子に話して聞かせているようだった。

「人にはそれぞれ自分の精神の軌道を持っているものなのよ。火星や水星がそれぞれの軌道だけを回るようにね。わたしはあの人の精神の軌道を理解できなかった。いえ、しようとしなかった。うぅん、もしかしたらわたしなりに理解したのかも知れない。理解したつもりで、彼の精神の軌道を修正しようとしたのね。できるものだと勘違いしてしまったのかも知れない。傲慢だったわ。でも彼はわたしの思うとおりには生きたくなかったんだ

わ。妻の実家の経済力になんか頼りたくなかったのよ。力やお金にこびたくなかった、小さくても自分の力で人生を切り開きたかったのよ」

「そうね確かに正人兄さんは男気が旺盛だったわ。でも頑固でもあったんだわ。何もそんなにすべてを自分の力にこだわることはなかったと思うわ。人間一人の力なんてしょせん知れたものだわ。自分の運を生かすという風に、お父さんの援助を受け止めることはできなかったのかしら。事業で成功したり政治で名をはせたりしている人たちだって、みんな大なり小なりスポンサーを得たり、チャンスを抜け目なく利用しているものだけど。かたくな過ぎるわ」

と、道子はやはり自分たち夫婦のこれまでの生い立ちを考えるとき、正人のかたくなな生き方には反発を覚えずにはいられなかった。環はそれはきっと正人の動かしがたい人間性と、彼の生い立ちにあり、そして明と彼の取り巻きたちとの摩擦が原因したためだろうと言った。

「それにね、みっちゃん、夫婦って一度道をすれ違うと、途中ではなかなか気持ちを素直に交えることができなくなってしまうらしいわ」

「でも正人兄さん、ひどい！　明兄さんとのことや会社でのストレスをみんな環姉さんにぶっつけるなんて」

と、低い声で言った。すると

「彼を追い詰めたのはわたしよ。さっきも言ったでしょ？　彼の精神の軌道を修正しようとしたって、時間をかけて。そして最後は自分の手で地獄の釜の蓋をあけたばっかりに、正人を追い詰めただけでなく、自分自身をも嫉妬の業火で焼いてしまったんだわ。彼にも息抜きが必要だったのに、少しくらいの夜遊びは目をつぶればよかった」

「夜遊びって、女性がらみも？」

「初めは大したことではなかったのよ。お酒の延長線上にいた人だったり、マージャンがらみだったり……」

「でもゴルフだお得意さん向けの接待旅行だってうちの主人だって、しょっちゅう家を空けているわ。何をしているのか分かったものじゃないわ」

「みっちゃん、それでいいのよ。人間、思うのはみんな自由だし、心の中の事情までは誰も踏み込めやしないのよ。わたしたち女房の夫への疑いは、そうかもしれないけど違うかもしれないのよ。その中間地帯をわたしは持たなかった。中立地帯って、世界平和のためだけにあるんじゃないのよ。わたしはね、いつも不安だった。正人が離れていってしまうんじゃないかって。そんな自分の心の波をうまくコントロールできなかったのよ」

そう言って、環はさらに言葉を続けた。

「あれは正人が最後に付き合った女だった。わたしね二人の間に踏み込んだことがあるのよ」と、さらっとした顔をした。

「踏み込むって、環姉さんのようにわたしたち親兄弟の前でさえ、泣き言ひとつ言わなかった人が……信じられない」、と言って道子は環の顔をまじまじと見つめた。すると環はさもおかしそうな表情を作って

「みっちゃん、夫の浮気に嫉妬しない女房なんていると思う？　いたらお目にかかりたいわ、好きになって、この人に自分の生涯を預けて生きようと思ったのよ。裏切られるなんて、許せないわ」。

道子は予期しなかった環の告白に驚いた。彼女は通夜の会席の座で、母親や姉の友子が環を冷たい感情の持ち主だと決め付けたとき、少なからず同意したのを思い出す。道子は環のそんな言葉を聞いたとき、何か忘れものをしていたのに気がついた。

思い起こせば、娘時代の環は性格はおだやかだったが、決して暗い方ではなかった。妹の道子にはいつも優しいまなざしを向けていた。そして人と争うことを嫌ったように思う。だが反面、友子のように積極的で自己主張が強くはなかった分、内側に秘めたこれぞと思うものは、他に譲ることはなかった。それは正人との結婚を決めたときに強く表わされた。二人の結婚には母親と明が否定的だったのだ。

環は今道子に、夫の浮気に嫉妬しない妻なんかいるはずはないと言った。たしかにそれには道子は同感だった。しかし、だからと言ってすべての女房が夫を相手に全面戦争に出るとは限らないだろう。どこかに妥協点を見出す場合もある。たとえば、経済的に妻が実験を握ってしまうとか、そのほかにもあるだろう。

だが環は道子が思ったより戦闘的だったようである。裏返せばそれだけ正人に対する愛情が深かったとも言えるし、執着心が強かったとも言えるだろう。そこまでの愛憎の世界を道子はまだ経験したことがなかった。

道子は尋ねた。

「二人の間に踏み込んだって、いつ？　そんなこと聞いてないわよ。一人で？」

「もちろん一人よ、誰にも相談したりしなかったわ。いつだったかな、三、四年前かしら……女はね、小さなスナックを一人で経営していたわ。正人がその女とどこで知り合ったのかは知らない。なんとなく妻には夫の不貞って分かるものなのよ。特別な嗅覚が備わっているように分かってしまうものなのよ。それからわたしは探偵社を雇って彼の素行を調べさせたの。いつもの遊びではなさそうだった。ときどき外泊をするようになったわ。もちろんそれなりの理由をつけてね。出張が一日コントロールされていたこともあったわね。男って不思議な生き物よ、同じ手を何回も使うの」

そこまで言って環は、やんちゃ坊主のいたずらを見つけた母親のような顔をした。正人を亡くしてしまった彼女には、これらのことはすべては過去の出来事になってしまったのである。

「ある晩、わたしは探偵社に調べさせた女のスナックに行ったのよ。九時くらいだったかしら。客は誰もいなかった。正人は商用で出張だった。明日は家に帰る予定になっていた。でもわたしの嗅覚が働いたの。彼は戻る日をわたしには、一日遅く言っているな、ってね」

環はまるで箇条書きになった文章を読み上げるように淡々とそう喋った。道子にはその感情の通わない言葉の連なりが、次に来るなにか重大な事態につながってゆくようで不気味な感じがするのだった。そして

「もしわたしの勘が外れたとしてもそれはそれでいいと思ったわ。正人が入れ込んでいる女にも会ってみたかったし。こちらの素性は隠しておいて彼女がどんな気持ちで正人と付き合っているのか知るのも悪くないと思えたし……」

「でもそれって危険じゃない？　話の内容次第で環姉さんは鬼にも蛇にもなってしまうかもしれないでしょう。まさかお姉さんが乱闘、なんてこともないでしょうけど」

と、道子は最後の方は声を少し落として環の顔色をうかがった。

「うぅん、そうならない自信はあったわ。そこでわたしが暴れたら、本当に正人を失ってしまうと思ったから、それはしないでおこうと心に決めていた」
「どんな女の人だったの？　美人だった？　」
実際にはどうでもいいことかも知れないけど、案外女房とはそんなことが気になるものである。道子も例外ではなかった。
「わたしもそう思ったの、写真も調査報告書の中にあるにはあったんだけど、全体的にぼやけていてはっきりしていなかったの。それで実際見てみると、案外貧相だったわ。小柄でやせすぎで、化粧も下手で。正人がこの女のどこに惹かれたのかって思った。一時間ほど座っていたかしら、わたし。その間に彼女と交わした言葉は二言三言。元来が口数が少ないのか、直感でわたしの素性を見抜いていたのか、それは分からなかった」
道子は、「それで」と、環に先を促した。
「うん、店を出たのは十時過ぎくらい。わたしはこの夜は正人がここに来るだろうと確信していたから、少し離れたとこれで見張ったの、まるで探偵みたいでしょ。それでね、来たわよ彼」
「それで踏み込んだの環姉さん」
「まだよ、わたしだって初めての経験よ。胸は早鐘を打っていたわ。迷いもしたわ。これから繰り広げられる修羅場を想像して、やはり止めようかと決心したとき、スナックの小さなスタンドの明かりが消えたの」
「閉店、ってこと？　」
「そうらしいわ。間もなく二人が出てきて、腕を組んで歩き始めたのよ。こんなとき、あなたならどうする？　引き返して家に帰る？　」
と言って、環は道子の顔をのぞく。道子は環が演出するドラマに引きずりこまれていた。
「わたしなら、二人の後をつけるわ」
「それから先は？　」
「分からない、でもとりあえずは二人から目を離すなんてできない」
「そうでしょう、わたしもそうしたわ。二人はしばらくそうして歩いていった。わたしも気づかれないように後に続いたわ。女の楽しそうな雰囲気が、少しはなれたところのわたしにまで伝わってきたわ。いい気なもんよ。許せなかった。わたしがこんなに苦しんでいるのに。後ろから思わずとび蹴りでもしたい衝動にかられたわ。でもそれはかろうじてわたしの中のもう一人のわたしが、押しとどめたわ。十五分かそのくらい歩いたかしら、古い小さな一軒家の前で二人は立ち止まり、女が鍵を開けた。引き戸を音を立てて開けたのは正人だった。彼が先に家の中に入った。いかにもなれた仕草だった。二人の関係を知らない人が見たら、共働きの夫婦が途中で落ち合って、一緒に家路についたという風にしか見えなかった。そして女がこちらを振り返りもせずに、後ろ手で戸を閉めた。わたしという追跡者がいることなんて、ツユほども警戒していなかったわ」
環は一気にそこまで言って一息ついた。つらそうだった。きっとそのときの感情がよみがえってきたのだろう。道子は何も言えなかった。環は続けた。
「わたしその後どれくらいあの家の前に立っていたのか分からないわ。後で振り返っても何を考えていたのか覚えていないの。もしかしたら恐ろしいことを考えたのかもしれないけど……ただ寒かったのだけは覚えている。そして月の明るい夜だったことも。そう今

夜と同じように」
　道子はそっと環の顔を盗み見た。白い顔は喪服によってより際立って、青白く妖艶にさえ感じられた。環は今、あのときの感情を呼び起こしているのだろう。目が異常なまでに冴え冴えとしている。道子は無言を通した。彼女は苦しかった姉の過去を無言という思いやりで包んだ。環は続けた。
「わたしねいつしか女の家の引き戸に手をかけていたわ。鍵はかかっていなかったわ。意外だった。もし鍵がかかっていたら、そのまま引き返していたかも知れない。わたしはそっと靴を脱いで家に上がったわ。本能的に足音を忍ばせたのね。二人はわたしが入ってきたのにまったく気づかなかったみたい」
　道子は息を呑んだ。それから先の環の行動を読み取ることができなかったからだ。道子はともすると、過激な想像をしてしまう自分を戒めた。ただ彼女が異常な精神状態にいたのは十分に理解できた。夫と愛人の現場に乗り込むなんて、普段のプライドの高い環の性格からは、考えも及ばない行動であった。
「玄関を上がってすぐの部屋には明かりはなかったけど、次の部屋からほの暗い明かりが漏れていた。二人はその部屋にいたのよ。気配で分かったわ。わたしはためらわずに一気に進んだわ。そして思いっきり力を入れて、その部屋の戸を開けたの。彼らは並んで布団の中にいたのよ。わたしは頭にかっと血が上って、次の瞬間、二人のかぶっていた布団を引っ剥がしたわ。どう？　みっちゃん、驚いたでしょ？　わたしはそんなことをやってしまったのよ。正人も女も素っ裸よ。わたしの頭の中は真っ白」
　と言った環の顔は青ざめていた。道子はこのとき環が地獄を見たのだと察した。だがそうだろうとは言えなかった。ただそのときの真っ白になった環の頭の中を、自分がその立場になって想像するしかなかった。環の中を狂気が走ったとしてもなんら不思議はなかっただろう。すると環は
「わたし見たのよ」
「えっ、何を？　地獄を？」
「ええ、そう。女の片方の乳房がつぶれていたのを……」
　道子は唖然とした。環は地獄で女の片方の乳房がつぶれていたのを見たと言った。それが生まれつきのものなのか、後天的な事情によるものなのかは分からない。薄闇の中に浮かび上がった一瞬のその映像は、つぶれた片方の乳房の残像も含めて後々環を苦しめることになったのである。道子はさまざまな疑問を残しながらも
「さぞかし、正人兄さんたち二人は驚いたでしょうね。環姉さんがいきなり現れただけでも肝がつぶれたでしょうに……それにしてもお姉さん、ずいぶん大胆なことをしたものね」、と言った。
「そうね、わたしは後のことを考えてしたことではなかった。女の反応は素早かったわよ。脱兎のように布団から抜け出して、自分の服をかき抱くようにして次の部屋に消えたわ。正人は呆然としていたわ……自尊心の強いわたしが寝込みを襲うなんてことは考えられなかったでしょうね、正人には。わたしだって結果を計算して起こした行動ではなかったわ」
　そう言う環はどこか勝ち誇ったような表情を浮かべた。そこには古い殻を内側から破った自信のようなものがのぞいていた。しかしそれにしてもその場をどうおさめたのだろう

か、正人はどんな振る舞いに出たのだろう。少なくても、愛人の前での男のプライドはズタズタになったはずである。

「それからね、わたしはフロアーに正座をして、正人に服を着けさせたわ。彼は母親の言いつけに従うように素直だった。わたしは最後まで女の名前を尋ねることも、二人のなじんだいきさつなど詰問しなかった。だから、そんなことはなにも知らずじまいになったけど。次にわたしは彼女を呼んで、両手をついて挨拶をしたのよ。夜分にお騒がせいたしました、この者は私の夫ですので返していただきますって。後は、正人を引っ立てるようにして家に連れて帰ってきたわ」

環は道子にまるで映画のワンシーンでも観せるような、真迫な話術で迫った。その言葉使いや顔の表情には作り物は一つとしてなかった。かえってそのシンプルさが、道子にさまざまなことを喚起させ想像させたのだった。

道子は尋ねた。

「それからの正人兄さんは、どうなったの」

「どうなったと思う？　彼は口ではわたしにすまなかった、って土下座をして謝ったわ。もう二度とあんな遊びはしないって。正人はずうずうしくもあれは遊びだって言ったの。それから一週間ほど普通に過ごして、彼、ある夕方、タバコを買ってくると言って、ふらっと家を出て行ったの。それっきりよ。何日も家を空けるそぶりなんてつゆほども見せなかった。その日は会社から戻って着流しに着替えて、居間で新聞を読んでいたのよ。だから履物だって下駄だったはずよ。彼はそれで電車に乗って女のところに行ったの。帰って来なかった。一週間も」

「一週間も？　会社はどうしたの？……あの同じ女性の所？」

「ええ、多分ね、正人は女とは遊びだって言っていたけど、そうじゃなかったのよ」

「そうかしら、本当にそうかしら、わたしが見た限りでは兄さんは、環姉さんや家族を愛していたわ」

「わたしが追い詰めたのかもしれない。でもあんな場面を見てしまってからは、わたしはいつも息苦しくて、頭の中は正人と女の裸で絡むシーンがついて離れなかった。苦しかったわ。地獄の釜の蓋を自分の手で開けてしまったことを、わたしは後で激しく後悔したわ。見なければ浅ましい妄想に昼夜付きまとわれることはなかったんだわ」

すべてを言い終えた環はすっかり力尽きたように見えた。道子が見た先ほどの環の般若の面をつけた姿は、彼女が語った地獄の釜の蓋を開けてしまった環の心の苦しみだったのである。

しかし道子が見たのは環の般若の顔だけではなかった。般若の次には彼女は小面の面をつけて微笑んだのである。それは正人を許し、自身の苦しみから解放された優しい女の顔だった。あれは環が言うように、彼女の最後の嫉妬心の火炎噴射だったのだろう。

環は道子には言わなかったが、正人を最後まで愛していた。その愛情は彼を愛した若き日から一つも変わらなかったのである。彼女には夫のすべてが魅力的だった。精悍な面立ち、眉を寄せ苦悩に満ちた表情、対照的に眉を開いたときの希望に満ちた笑顔。強くて頑固な意志を物語る引き締まった唇。筋肉質の腕。その頑丈な胸に力強く抱きしめられるときなどは、大海の波間をスリリングに乗りぬける快感すら感じたものである。彼女は正人を誰にも渡したくなかった。

環は続けた。
「みっちゃん、女は本当の意味で男を愛することなんてできるのかしら？　わたしは自分を振り返って、正人を自分の気に入る作品に作り上げようと、必死になっていたような気がするわ。自分にとってステータスの高い将来設計、理想的な家庭、自分の気に入るだんなさま。でも正人は作品ではなかった。なりたくなかったから、わたしの手からこぼれていったんだわ」
「でも誰もそこまでは考えないわ……」
「そうね、わたしも彼を看病するこの一年間でそれを悟ったの。わたしたち夫婦はこれまでもいろんな試練に出会っている。このたった一年で悟ったものを、もっと早い段階でわたしは気づくべきだった。そうすればお互いをこんなに追い込むことはなかったと思うわ。わたしと正人は夫婦として、結局、未完の肖像画で終わってしまったのね」
道子には環のこの最後の言葉は胸に痛く響いてくるのだった。

春の夜は青く静かに更けて、姉妹が見上げる中空には桜の白い花びらがたえまなく散り続けていた。幽玄の世界が二人を包んでいった。